令 和 3 年 度

入学者選抜学力試験問題

国　　語（前期）

〔注　　意〕

1. 監督者の指示があるまで，この冊子を開かないこと。
2. この冊子の問題は13ページからなる。落丁・乱丁および印刷の不鮮明な箇所などがあれば監督者に申し出て，問題冊子の交換を受けること。
3. 監督者の指示に従って，4枚の解答用紙に受験番号および氏名を必ず記入すること。
4. 解答は，必ず解答用紙の指定された場所に記入すること。
5. 解答に字数制限のある場合は，句読点を字数に数えること。
6. 解答は，内容とともに，用語，表記，構文にも注意して書くこと。
7. この冊子は持ち帰ること。

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

社会というものは、そこから漏れ落ち(かけ)たときに、よく見えることがある。薄くなって初めて空気の存在に気づくように。

たとえば、学校や職場、就職活動などの場面で、コミュニケーションがうまくいかず、気詰まりな沈黙を招いてしまったり、周囲から浮いてしまったりすることは、そのような「漏れ落ち」経験の身近な一例である。あからさまな拒絶の反応が返ってくるわけでなくても、周囲の人びとの嘲笑(ア)を含んだ軽い驚きの表情や、受け止められも投げ返されもせずしぼんでゆく言葉が、どうにも居たたまれなくて、ぎくしゃくしてしまう自分のキョドウ(イ)を周囲の人びとがどう見ているかと思うとさらに居たたまれなくて、その場から消えたくなる。そうした経験は日常的なものであり、誰もが一度はそんな思いをしたことがあるのではないだろうか。

一方に、周囲から「あの人コミュ力高いな」と思われている人がいる。明るく親しみやすい雰囲気を放ち、人の話にテンポよく切り返し、華やいだ笑い声を上げる人。自然体でありながらその場の「空気」を壊さない、というよりも、自分が自然体で振舞える「空気」をいつの間にか作り出して、なおかつ強引さはなく「感じよく」ありつづけられる人。そんな人たちの土台には、「私はみんなに興味を持たれている」というまっとうな自信があり、それが「ナチュラルな感じのよさ」を根本から支えている。

他方には「コミュ障」と名指される人がいて、彼ら・彼女らには「無口で暗い、ノリの悪い、空気の読めない人」という印象が付きまとっている。「コミュ力の高い人」が持っている「ナチュラルな感じのよさ」が、「コミュ障の人」にはない。がんばって言葉を発しノリを合わせるよう努力すれば、輪に入ることはできる。だが、がんばったぶん家に帰るとどっと疲れが出てへたり込んでしまい、長く続かない。コミュニケーションをまったく楽しめていない自分に気づき、その場はうまくいったにもかかわらず、自信を喪失してしまったりする。だからといって「ナチュラル」でいると、「あの暗い人」と言われ遠ざけられてしまうのだからややこしい。

「コミュ障」とされる人とはいわば、コミュニケーションという道を一緒に歩いているのに、周囲の人と歩幅が違っているために、他の皆が何事もなく通り過ぎていく裂け目に足を取られてつまずき、落ち込んでしまうような人、ではないだろうか。

コミュニケーションの裂け目にはまり込んでしまった人は、単に「そのとき・自分が気まずい」だけではなく、気まずさを自分に対して可視的にすることで、「気まずい自分を見る自分」を成立させ、そのことで気まずさを増幅させてしまうようなところがある。もちろんなかには、周囲の人が「コミュ障」と名指すけれども当の本人にはまったくその自覚がない、という場合もあるだろう。だがこの言葉は「克服する」「治す」などの語とセットでしばしば使われており、「自分はコミュ障だ」と自覚して生きづらさを感じている人が多いように思う。つまりこれは「あいつコミュ障だよな」という外からの揶揄(やゆ)であると同時に、「私コミュ障だから」という内からの自虐の言葉なのだ。

そこには「コミュニケーションがうまくいかないこと」自体にもまして、「あの人はいま裂け目に落ちた」と周囲の人に気づかれていること、それを意識してますます言動が不自然になってしまうことがしんどい、という面がある。それは、ウ イヤオウなしに「自分が他者からどのように見られているか」を反省的に意識させられる経験であり、三面鏡をのぞきこんだように、「見る自分、を見る自分、を見る自分……」の連鎖が可視化されていく。

そして、このように自分の足下がぐにゃりとゆがみ、地面はまったく盤石ではなかったと知るとき、そのなかにすっぽりとくるまれていたあいだは意識する必要もなかった「社会」のようなものの一端が、あらわれるのだ。それは、そこからこぼれ落ちる自己にとって敵対的な異物としての「社会」である。そうした意味での「社会」の輪郭を掴(つか)みやすいのは、「コミュ力」があるとされる人よりも「コミュ障」とされる人の方だろう。A

しかし、「社会から漏れ落ちてはじめて社会が見える」というのは一つの側面でしかない。B「社会から漏れ落ちている」と思っている人が、実際にはこの社会に深く根ざした存在である、ということがある。

くり返しになるが、「コミュ障」とされる人は単にコミュニケーションがうまくいかないのではなく、「うまくいっていない自分を他者はどう思っているか」という再帰的な視点を発生させるために余計にしんどくなっている。これはよく考えると不思議

なことだ。「自分は周囲からどう見られているか」と他者の視線に配慮できるということは、その人が「社会性」を持っていることを示している。つまり、ほんとうに社会から漏れ落ちていたならば、「社会から漏れ落ちている自分」に痛みを感じることも少ないと考えられるのだ。

「コミュ障」は二〇一〇年代になって広まった言葉だが、こうしたいわば「非社会性の社会性」とも言うべき事態そのものは、古くからある。「不登校」と呼ばれる現象である。不登校は、日本では一九五〇年代末から報告があり、現在も継続している、「子ども・若者と社会とのつながり」をめぐる社会問題の「老舗」といえる。

これまで、不登校やひきこもりになる人は「社会性がない」と見なされてきた。たとえば、一九八三年の文部省の生徒指導資料は不登校の子どもやヨウイク者について「適応性に欠ける」「社会性が乏しい」と表現していたし、一九九〇年の青少年白書は、不登校をひきこもりとともに「非社会的問題行動」と見なしていた。一般的にも、特に一九七〇年代半ばから九〇年代にかけての、「よい学校に入ってよい会社に入る(あるいはそういう人と結婚する)ことを、社会に認められたよい人生」と考える「学校＋企業＝社会」という信憑のもと、教室になじまない不登校やひきこもりは、それだけで「社会から漏れ落ちた」存在と見られがちだった。

しかし、「不登校は社会と疎遠である」という主張には、二つの点で疑問をさしはさむことができる。

第一に、「社会問題の社会学」の視点からみれば、「不登校を見ると社会が見える」と言える。たとえば、第二次世界大戦後から二〇〇〇年前後くらいまでの中学校の長期欠席割合を示すグラフは、「U字型」を描く。すなわち、いったん減少し、底を打って、ふたたび増加するのだ。学校が定着していく初期のプロセスにおいて、都市―農村や貧富の格差が大きかった一九五〇年代ぐらいまでは、経済的事情や親の教育意識の希薄さなどから、学校に行かない子どもは多く存在していた。それは「不登校」というよりも、より広範な領域に関わる前近代性の、学校における表れとして理解できるものだった。その後、近代化にともない子どもの長期欠席率は減っていく。底を打つ一九七〇年代半ばは、日本社会が一定の近代化を達成した時期だといえる。この頃、第三次産業従事者数が第二次産業従事者数を上回り、専業主婦率が戦後最も高くなり、高校進学率が九〇パーセントを超える。

そして、「学校に行き企業に就職する＝社会とつながる」という等式が成立していく。だがこれ以降、長期欠席率はふたたび増加に転じるのだ。学校は近代化のための装置であり、近代化が達成されればその目的は失われる。登校する意味は自明でなくなり、「どうして学校に行かなくてはならないのか？」と問うようになった子どもたちが、さまざまな理由から学校を離れ始めるのは不思議ではない。

人びとが何を問題と見なし何に苦しむかということは、社会的文脈に影響されながら決まっていく。このようにマクロな視点から見れば、「社会から漏れ落ちた存在」としての不登校・ひきこもりは、戦後の日本社会が何を「社会」と見なしてきたのかを、逆照射する存在とも言えるのだ。

第二に、個々の「社会とのつながりにくさ」というミクロな面に照準した場合にも、「不登校の人は社会性がない」とは言えない面がある。これは、そもそも不登校という概念を通じて、いったい何が問題とされてきたのか、という点に関わっている。

不登校という概念の根幹には、「人が合理的な理由なく他者や社会とつながらない状態」がある。不登校とは、文部科学省の問題行動調査によれば、「何らかの心理的・情緒的・身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童・生徒が登校しない、あるいはしたくともできない状況にある者（ただし、「病気」や「経済的な理由」による者を除く）」を指す。

この「合理的な理由なく」という点がミソである。「学校に行きたいのに貧乏だから行けない」とか「勉強がイヤだから学校をサボりたい」ということなら、理解可能だ。だが、それらの理由が見られないにもかかわらず、人は時として、社会とのつながりをもてなくなることがある。不登校とは、そのような事態を概念化したものなのだ。

一九七〇年代ごろから精神科医として不登校（当時は「登校拒否」）問題に取り組んだ梅垣弘は、神経症的な長期欠席をシキベツ[オ]するために、子どもが示す「すくみ」反応に注目していた。従来型の長期欠席のように怠学や教育意識の希薄さが理由であれば、「学校なんて行きたくない」「どうして学校に行く必要があるのだ」と反抗することはあっても、「学校に行け」という登校刺激に対して「行かなくてはならないのは分かっているのにできない、自分はだめだ」と立ちすくんでしまうことはない。

神経症的な長期欠席におけるすくみや不安は、本人の緊張感を高め萎縮[カ]させ、ますます登校から遠ざける。だから、およそこ

の現象が問題化されたごく初期から、学校に行かない子どもに対する専門家介入の一つの方針は、登校圧力を下げることで、当事者のすくみ反応を緩和することだった。神経症的な長期欠席のごく初期の学術的な報告である「神経症的登校拒否の研究」のなかで、著者の佐藤修策は不登校への対応について次のように書いている。

親は機会あるたびに説得したり、おどしたり、しかったりして登校させようとする。時に教師もこれに参加する。家庭生活はすべて登校に向けられ、おやつにも「学校に行けば……」の条件がつく。この刺激にクライエントは反抗し、逃避し、柱にしがみついて反応するのは全ケースにみられる現象である。この親や教師の刺激づけは登校拒否症状、神経症の強化(reinforce)に役立つのみである。症状は発展する。したがってまずこの強化関係を絶つことである。具体的には親や教師に登校拒否の原因について理解を求め、登校へのいっさいの努力――強圧的なものも、説得的なものも放棄するよう助言することである。

ここで「強化関係」という言葉によって示唆されるのは、他者の価値や態度を内面化しているという意味で「社会性がある」にもかかわらず――というより、社会性があるからこそ――社会とつながりにくい、という逆説である。D「個人が社会をつくり、社会が個人をつくる」とする社会心理学の古典的な議論によれば、他者の態度を内面化することによって人は社会の一員となる。だが現実には、人が他者との共同社会を営むことは、それほど単純なものではないようだ。

(貴戸理恵『「コミュ障」の社会学』一部改変)

問一　傍線部アからカについて、カタカナを漢字に、漢字をひらがなに改めなさい。

問二　傍線部Aについて、「コミュ力」があるとされる人が「コミュ障」とされる人よりも「社会」の輪郭を掴みにくいのはなぜか、七〇字以内で説明しなさい。

問三　傍線部Bについて、「社会から漏れ落ちている」と思っている人が、実際にはこの社会に深く根ざした存在であるのはなぜか、八〇字以内で説明しなさい。

問四　傍線部Cについて、この視点からみれば、なぜ不登校は生じたのか、五〇字以内で説明しなさい。

問五　傍線部Dについて、なぜこの議論では不登校問題を説明できないのか、八〇字程度で説明しなさい。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

著作権の関係で公開できません。

7～12頁

問一　傍線部Aとはどういうことか、八〇字程度で説明しなさい。

問二　傍線部Bについて、原始社会における交換はどのような特徴を持つのか、九〇字程度で説明しなさい。

問三　傍線部Cについて、原始社会における贈与と供犠の間にはどのような関係が成立しているのか、一〇〇字程度で説明しなさい。

問四　傍線部Dについて、事物化した羊を破壊するとはどういうことか、一〇〇字以内で説明しなさい。

著作権の関係で公開できません。